

新資料

道元禅師行業記（上）

伊藤俊彦

一、はじめに

二、写本建撕記について

三、延宝本建撕記考

1 伝承

2 延宝本建撕記の形態 一

3 本文

(イ) 本文（以上上）

(ア) 凡例 二

4 延宝本建撕記の形態 二

注 四、延宝本建撕記と他の写本建撕記との異同
五、むすび

福井市立郷土歴史博物館の収藏にかかる「道元禅師行業記」（以下、延宝本建撕記若しくは単に延宝本と呼称することにする）については、筆者の管見するところでは、曹洞宗学界の泰斗、大久保道舟博士の畢生の労作、「修訂増補道元禅師伝の研究⁽¹⁾」の中に、極く簡単な解説があり、大場南北氏の「道元禅師傘松道詠の研究」の別刷の付記にやまとまつた解説がある以外は、同じく大場氏の筆になる「道元禅師和歌集新釈⁽²⁾」、大山興隆氏「草の葉⁽⁴⁾」、及び永久岳水氏の「傘松道詠研究の資料⁽⁵⁾」と題する論文の中にわずかにその名を見い出すことが出来るに過ぎない。なお、「新纂禅籍目録」（以下、禅籍目録

と略称)には、その名を見い出すことが出来るが、「国書総目録」⁽⁷⁾には何ら記する所がない。

夙に、建撕記の写本の一種である「道元禅師行業記」が、郷里の福井市立郷土歴史博物館(地元では、歴史館の名で呼ばれている)に収蔵されていることを仄聞してから、随分久しうが、機縁熟さず、本格的に研究する機会に恵まれなかつた。

昭和四十七年二月、永平寺上山の砌、たまたま、同館を訪れたところ、館長松平永芳先生の御好意により、親しく延宝本建撕記を拝覧することを許され、加之、同館で延宝本建撕記をマイクロフィルムに撮影して、御惠贈下さる光榮に浴した。

建宝本建撕記については、その存在を知る人すら極めて稀であり、本文に至つては全く世に紹介されていないので、ここに筆を執つて紹介の労をとることとした。なお、同フィルムは、同学の志の研究の便を考え、駒沢大学図書館に寄贈した。現在、同図書館の復写室に保管されている。

二 写本建撕記について

道元禅師の伝記研究の根本資料である建撕記は、今までもなく、永平寺十四代建撕和尚の編輯になる道元禅師の史伝であるが、建撕の筆になる原本は古く散佚して、現在見ることが出来ないのは周知の事実である。

書写者	沙門瑞長
所蔵者	河村孝道
発見者	小川靈道
発見年	昭和三十四年
影写本	駒沢大学図書館

江戸時代における洞門切つての学匠面山瑞方(一六八三—一七六九)の訂補建撕記序によつて、建撕記の写本が伝承されていた事実を知ることが出来るが、しかし、その写本がいづこに秘在するか、全く知る術はない。
ところで、道元禅師伝の研究が進むにつれて、近年あいついで写本が発見されるに至つた。

現在、写本として伝えられているのは、次の五本である。

(敬称略)
一、永平初祖道元和尚之御状記(永平建撕記)

書写者 不詳
書写年代 天文七年(一五三八)

所蔵者 金沢大乗寺
発見者 曹洞宗宗学研究所

発見年 昭和四十七年十月六日

二、天正本建撕記⁽¹⁰⁾(天文本建撕記・瑞長本建撕記)
書写年代 天正十七年(一五八九)

1	題名	永平高祖行状建撕記	書写年代	元文三年（一七三八）
2	編集者	小川靈道	書写者	愚弟 ⁽¹³⁾
3	発行	昭和三十七年一月十五日	所蔵者	福井県永平寺 ⁽¹⁴⁾
4	発行所	日本仏書刊行会	発見者	岸沢惟安
三、道元禪師行業記（延宝本建撕記）				
書写年代	延宝八年（一六八〇）	大乗寺本の四本はいずれも昭和三十年以降の発見にかかるものである。	発見	昭和二十六年
書写者	不詳	その中、元文本 ⁽¹⁵⁾ 、延宝本、大乗寺本の三本は未だ公表されていない。	所蔵者	福井市立郷土歴史博物館
所蔵者	福井市立郷土歴史博物館	延宝本建撕記には、「越國文庫」、「図書寮」、「出賣」（なお、	発見者	大久保道舟
発見者	大久保道舟	「賣」の字は、捺印の際の不手際のためか全く読みとることが出来ない）及び「福井市立郷土歴史館図書」の四類の蔵書印が捺されている。	発見	昭和三十七年十月
四、開山禪師之行状（元禄本建撕記）				
書写年代	元禄七年（一六九四）	その中、元文本 ⁽¹⁵⁾ 、延宝本、大乗寺本の三本は未だ公表されていない。	所蔵者	駒沢大学国書館
書写者	門子	その中、元文本 ⁽¹⁵⁾ 、延宝本、大乗寺本の三本は未だ公表されていない。	発見者	永久岳水
所蔵者	駒沢大学国書館	その中、元文本 ⁽¹⁵⁾ 、延宝本、大乗寺本の三本は未だ公表されていない。	発見者	永久岳水
発見者	永久岳水	その中、元文本 ⁽¹⁵⁾ 、延宝本、大乗寺本の三本は未だ公表されていない。	発見	昭和三十年
刊本		その中、元文本 ⁽¹⁵⁾ 、延宝本、大乗寺本の三本は未だ公表されていない。	刊本	
1	題名	高祖道元禪師行状建撕記	(1) 伝承	
2	編集者	永久岳水		
3	発行	昭和三十四年四月八日		
4	発行者	山中書房（東京）		
五、祖山藏写本建撕記（元文本建撕記）				

最後の「福井市立郷土歴史館」の蔵書印はしばらくおくとしても、これらの蔵書印は、延宝本建撕記の伝承の経路を知る上において、きわめて大切な資料である。なお、延宝本には、印譜の抹消の痕は見当らない。少くとも、これらの諸印によつてみる限り福井藩主松平家、福井藩もしくは藩校に伝承されていたものであろう。

郷土史家の指摘するところによれば、これらの一々の印譜については、書誌学的、考証学的諸問題を残しており、現時点では明確な断定は下しえないと⁽¹⁷⁾いう。

なお、福井藩における藩校は、今の場合、

(一) 正義堂

文政二年(一八一九)九月、第十三代藩主松平治好の開創。福井藩校の嚆矢をなすものである。

(二) 明道館

安政二年(一八五五)三月、第十六代藩主松平慶永の建立。明治二年六月、明新館と改称した。

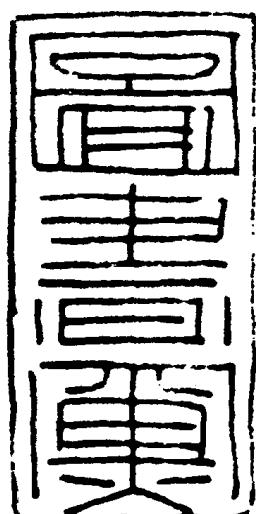
の二校(三校)を意味するものと考えてよい。

ところで、現在、延宝本建撕記は、福井市立郷土歴史博物館の春嶽公記念文庫に収蔵されている。春嶽公とは、福井第十六代藩主松平慶永(一八二八—一八九〇)のことである。同文庫は、春嶽公にゆかりのある品々や公一代の所有にかかる文献、史料が収められている。

春嶽公その人が、仏教ことに禅について、どの程度の関心なり、造詣があつたかは明らかではないが、同文庫には春嶽公書写の「永嘉大師証道歌」一巻(巻子本)が存する。⁽¹⁸⁾

福井藩の藩祖、結城秀康(一五七四—一六〇七・徳川家康の二男)が、越前に封じられたのは、慶長五年(一六〇〇)である。延宝本建撕記が書写されたのは、延宝八年(一六八〇)のことであるから、藩祖秀康の入越後、ちょうど八十年に当たる。

今後、福井県立図書館の「松平文庫」を始め、諸所に分散、収蔵されている福井藩ならびに松平家所蔵(本家・分家)の諸文献を精査し、更にこれらの蔵書印の研究を進めることによつて、延宝本建撕記の伝承の系譜の解明になんらかの手掛けが得られるのではないかと思われる。

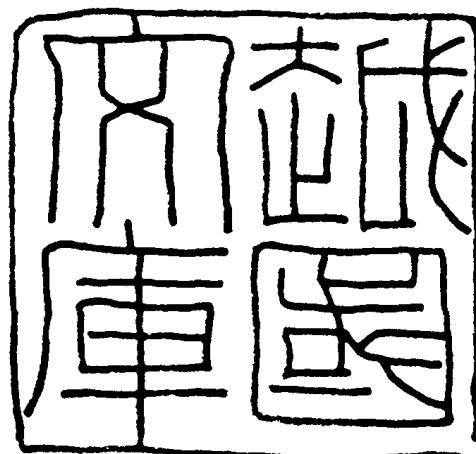


(圖書寮)

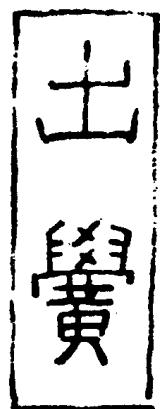
おきたい。

まず、延宝本建撕記の外面的形態について、簡単にふれて

2 延宝本建撕記の形態 一



(文越
國庫)



(出譽)

一、冊数 全一冊、二十四丁。落丁は無い。

一、寸法 縦二十七・七纏
横十八・七纏

一、料紙 楷紙。

一、題簽 題簽はいわゆる絵題簽
道元禪師行業記 全。題簽はいわゆる絵題簽
で、上方には山が、中央部には雲が、下方に
は草花(名称不明)が描かれていい。なお、
上方には銀粉が、中央部には金粉が砂子状に
ついているが、ともに退色している。

一、内題

一、界行

一、柱 枠、界線は無い。行数は片面十一行書き(た
だし、二十三丁左は十行、二十四丁左は六行)、一
行に約二十二字から三十字前後、収まっている。

書名と丁数が記されている。

一、例道元禪師行業記 一丁

識奥語書

一、刊写本。

一、書写年代 延宝八庚申歳。

一、書写者 不詳。

一、修補 原本には全く修補の形跡は無い。しかし、綴糸(四つ目とぢ)は極く新らしい。

一、保存 おおむね良好である。多少の蠹損、しみつきはあるが、判読には何の支障もない。

3 本文

(イ) 凡例

一、原本の原形を出来る限り、忠実に残すよう努めた。

従つて原文には私意による訂正、削除、加筆は全くなされていない。傍注、読み仮名(字音・字訓)送り仮名(古体仮名も含む)、捨て仮名、返り点(レ点、一二点、上、下点)、句読点、おどり点、濁点、半濁点等についても、同様である。

一、漢字の字体は、新旧漢字(今日いう所のいわゆる旧漢字、新漢字)が混淆して用いられているが、印刷の都合上、原本に即して両者を区別することは出来ず、全体として新漢字を用いざるを得なかつた。

一、用字の中の異字、略字、古字、当字、俗字、書きくせ等、あるいは各丁の行数、字数などについても、印刷の関係上、やはり改めざるを得なかつた。

一、誤字と思われる文字の中、その活字のないものについては、訂正を施したが、活字のあるものについては、右側に(ママ)と付記してその個所を指摘し

一、原本にある地名、人名、書名、年号等を示す傍線(右一本、中一本)、□印(中箱、左箱ともに同じ長方形)、一印(接字線)は、印刷上の制約によつて省略を余儀なくされた。しかし、段落を示す△印(三角形)、「印はそのままとした。なお、これらは接字線を除いてすべて朱で明示されている。

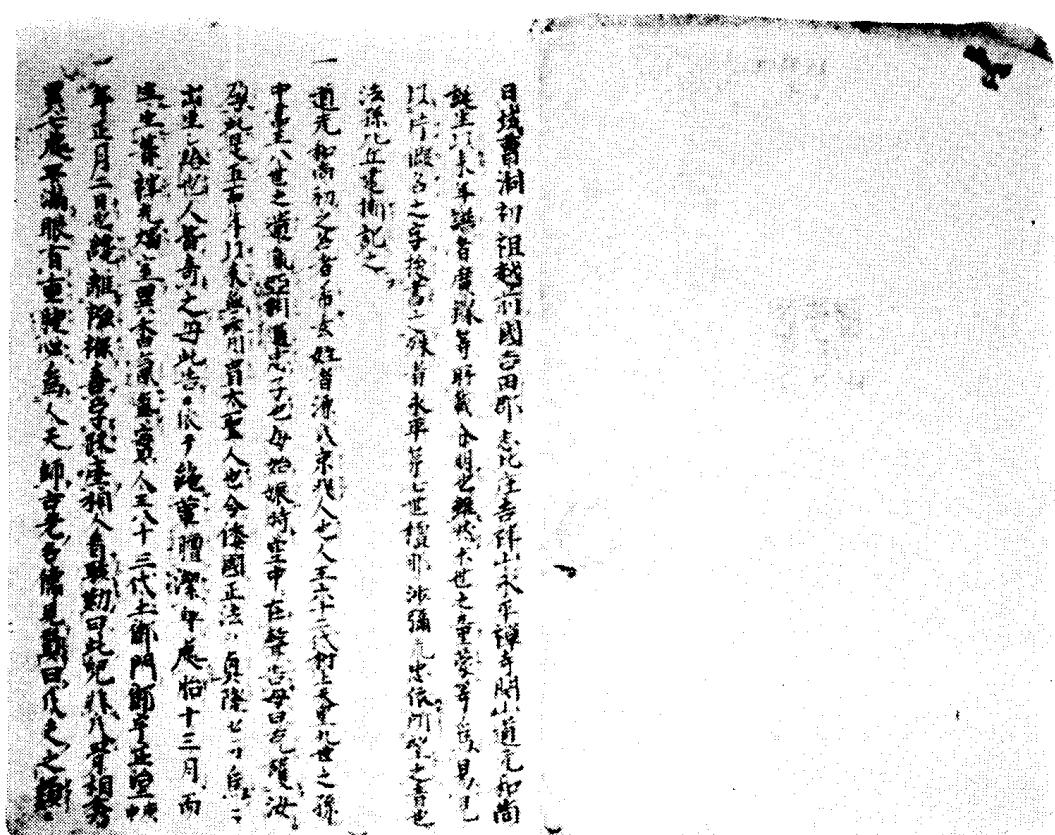
一、原本の丁の区分を『印』をもつて示し、その行頭に丁数及び表裏の別を注記した。

(注については、まことに不本意ではあるが、紙幅の関係上、すべて次号「道元禪師行業記」(下)にゆづることとした)

道元禪師行業記の前表紙



道元禪師行業記上(伊藤)



道元禪師行業記建長五年の条（十八丁裏・十九丁表）

建長五年七月古日天懷榮萬承玄參入院同八月初音中
城外上之也。師就而歸病赴權那寺利太守ヨリ鄉上客至トキテ、皇後
中間榮萬病併乞其醫師三七達セ可申タニと仰上客日
演誦歌詩之頃同

十年癸酉春正月

十ニ月未卧病木

計藥人情暫出侍

如未於半見箭王

丹波路ノ御上客有トニテ

御承人

入寺高士西洞院俗名子宣今ノ私宅先面給御達

草葉門子七年木部

年也

例典增減嘗來隨禮無還此歸一直悉隨其詔化

上竟便官院前脉病語及如平時日寢、往行依託歸云者外因

中若於秋半若於射下之久、惟多善於言談者在聖學果不

山谷時是中等意者以供養取音何常大是也既足堪博

詒供人得阿緣子文羅衣著三善退諸供於此轉法輪大端

無於此云般涅槃者也。他此經文轉而面前之往來付給亦然

夫連舉經卷一書所留餘七疋之遊空也。今俗空滅直釋音

諸佛三藏也。終一卷

建長五年八月廿八日寅泡及于承洛承整文索筆書留云
平四年中第天打西壁倒牆及大十乘軍身無處見治論
實不從平始然生化朝野計聞無不嗟動者師以嘉三年
庚申正月二日生世壽五十百歲臘平首也就中壽翁太守

道元禪師行業記の末尾（廿四丁裏）

一道元和萬之行狀神德施行上堂偈頌書狀問答
二代懷榮萬之行狀同書之此外世間流布之黎
子袖仍存之戒本不記

三代義久智高之行狀是世間流布之板本有之矣
紫木除



道元禪師行業記の冒頭（壱丁表）

道元禪師行業記全

(口) 本文

(1丁表)

日域曹洞初祖、越前國吉田郡志比庄、吉祥山永平禪寺開山、道元和尚、誕生以來年譜者、廣錄等所載分明也、雖然末世之童蒙等、為易見、以二片仮名之字一拔書之殊者永平第七世檀那沙弥元忠依所ニ望之者也、法孫比丘建撕記之、

一道元和尚、初之名者希玄、姓者源氏、京兆人也、人王六十二代、村上天

皇九世之孫中書王八世之遺胤、亞相通忠子也、母始娠時、空中在声、

告レ母曰、克護汝孕此是五百年以來、無二斎眉一大聖人也、今倭國正法ヲ興隆センガ為ニ、出生シ給也、人皆ナ奇レ之、母此告ニ依テ、絶葷臘潔身、

処胎十三月而生、生暮祥光燭室、異香氤氳、同氤、實人王八十三代、土御門

御宇、正治二申年正月二日也、纔離襁褓、必喜學二跌、相人看駭、其言一師智種夙

児非凡骨相秀異、七處平滿眼有重瞼、必喜學二跌、相人看駭、其言一師智種夙

凡夫之類ニ有ラズ、可成大器、須是称神童、後果如古老人、名儒見贊曰、此

(1丁裏)

同順徳之号

一建保元癸酉年、師十四歲、登延曆寺之戒

檀而受具、自余天台之宗風、南

道元禪師行業記上(伊藤)

九九

一建保元癸酉年、師十四歲、登延曆寺之戒
天之秘教、大乘小乘、義理悉習給フ、
一代門主ナリ也、中頃顯蜜無雙ノ之碩學、淨行持律之高僧也、
一同三乙亥年、師十六歲ナリ也、千光祖師七十五歲示寂故建仁寺江御出入有ル
事渡唐迄四箇年ナリ也、御弟子明全、或仏樹、或行勇禪師ト申ス也、千光
入滅已後、行勇ニ問法ト云、故ニ建仁千光和尚之像、永平寺干今

在之、并御弟子明全和尚像モ在之、仏樹和尚像モ在リ、師此像之作レ贊ナ(2丁裏)云
云、
平生行道徹通親シテ、寂滅以来面目新也
且道如何今日事、金剛焰後露ニ心身一ヲ
小子道元拝贊ト遊シタリ、永平法語ニ、仏樹先師忌辰之陞座、是以テ
思量スルニ、仏樹ワ師匠也、同ク亦建仁千光祖師之仏事法語モアリ、
其言書曰、千光禪師前權僧正法印、用詳大和尚位、忌辰ト在リ、其末ヘ
ニ曰、師翁千光和尚即今在ル何處一ト云コト有リ、爰迄モ正、翁父師ノ處不ルト

紛ト云、

一建保五年八月廿五日リ、明全和尚之室ニ入り給フト云、師十八歳
 也此春頃渡唐ノ望在便船ヲ待給フ、師自十三歳至迄十八歳六ヶ
 年之間一切経看給事二辺也、宗家之太事法門之大綱、本来本法性、
 天然自性身此理顯蜜之兩宗ニテ不レ為落居才大疑滯在リテ、三井寺
 公胤僧正所参^(3丁表)即問云、如ニ本來法身法性諸仏為甚麼更三菩提之
 道發心修行^{シ玉}公胤僧正教示曰、此問取我輒不可答、我宗家之雖為二訓
 誣我未其美尽伝聞大宋國ニ仏心印之在ニ正宗直入宋可尋給師公
 胤之教示聞即十八歳之秋出^テ本山^ヲ建仁寺掛錫、明全和尚隨順尚頭
 蜜奥儀究律藏戒儀習臨濟之宗風ヲ聞給即苗^{ミヤウ}龍之十世烈シ給フ、
 人王八十四順德天皇之号^{同八十五後堀河院之号}
 一承久三年辛巳年九月十三日建仁寺明全和尚師資之相伝在レ之也、
 一貞応二年癸未年大宋喜定十六年也、二月廿二日渡宋御年廿四歳ナリ
 仁明全和尚ト同船云同年四月着^ク明州界ノ^{サカイ}師之見干^{ヘタリ}典座教訓一也、
 同院之号^{同院之号}
 一喜禄二丙戌年大宋宝慶二年当先最初明州大白天童景德禪寺登掛^{セキ}
 ヲ望住持派^{楊岐宗之次也}無際和尚也、戒臘次ニハ不立新戒位ニ烈スベント

テ、即時ニ作タル僧之コトク、末ニ烈座スペシト云、師云、七仏以來(ママ)未聞不見、
 之法也、不審立ヒヤウ
(3丁裏)表書云、此娑婆世界之内、釈迦遺法流布之國、戒已
 弘通、仏法位次不論オ尊卑老少先受戒在ニ先座、後受戒者在ニ後座、蓋是
 七仏以來、諸祖通戒也、何至テ日本大宋ニ可ケンヤト有ル差異也、云、天童一山住
 持、両班大衆評定シグ曰、先例也トテ新戒位可シトツ立、其謂者自リ汝已前、入唐
 之諸僧、伝教弘法汝師翁用詳上人至迄、皆新戒之位立、蓋是國例也、
 大國小國差異也、返事在リ、師亦重表書云、諸仏教法依國豈有異
 乎、一家之兄弟、一仏之戒脉都無差異、先座後座復支而分明也、年月
 爭亂如レント此ノ書シテ捧給、天童一山而不得理、五山評定而尚先例新戒位定ム
 師亦重而捧表書曰、仏法徧ニ沙界、戒光照ニ十方、況乎經云、今此三界皆ナ
 是我有、其ノ中衆生悉是吾子、就中此娑婆界者、釈迦牟尼仏之國土、國
 已仏國人皆仏子、兄弟可シ混亂位次一法専具、仏法世法任ニ正理、天神
 地祇不レ昧理非、此理若シ已不シ正者、正法之正理、豈可シ明察一乎、幸イ仰ニ
 者不レ雜二誑者、仏家臘次シ已不シ正者、正法之正理、豈可シ明察一乎、幸イ仰ニ
 之聖德位宣ノ和僧之鄙懷天裁若モシ無クンバ私、伏乞正戒次ノ取意、
 不レ正者、正法之正理、豈可シ明察一乎、幸イ仰ニ中和

寧宗仁文招武喜定之聖主也、被下マカ
 依臘次立自余師聲ナ不隱叢林カクレ大
 故日本之諸僧入唐之時作僧戒臘サソウノ本立也、至テ今於ヨリ勅宣天童山セイタツ
 凡在宋徧參學道問道之次第アマ勒宣天童山セイタツ
 拝見嗣書シヨ末決ダマ太事ヲ也マ敕宣天童山セイタツ
 一次於徑山明月堂マミユダン見マニユ浙翁トウニ即問幾時到此間カシニ勒宣天童山セイタツ
 群恁麼來也、師答云、不隨群恁麼來、作麼生是ナラン是ナラン時作麼生是ナラン是ナラン時作
 來師云、既是レ隨イ群恁麼來、作麼生是ナラン是ナラン時作麼生是ナラン是ナラン時作
 口阿師不有無作麼生是ナラン是ナラン時作麼生是ナラン是ナラン時作麼生是ナラン是ナラン時作
 一繼跨台州小翠巖門參見卓公師乃問如何是ナルカ是レ是ナラン是ナラン時作麼生是ナラン是ナラン時作
 一次ニ萬年寺元鼎和尙惟一西堂宗月長老月堂無象等謁問道求法アマ子シ
 何レモ未契心彼ノ諸大老ノ眼晴何レモ師ニ劣り師大憍慢興シ
 テ、帰朝セント思イ、徧參ノ後、天童帰給所派無際和尚、早ヤ入滅、弥々
 既是殿底、為甚麼周徧恒沙界、卓云、徧沙界、
 一次ニ萬年寺元鼎和尙、惟一西堂、宗月長老、月堂無象等謁問道求法、
 何レモ未契心、彼ノ諸大老ノ眼晴、何レモ師ニ劣り、師大憍慢興シ
 一次ニ萬年寺元鼎和尙、惟一西堂、宗月長老、月堂無象等謁問道求法、
 何レモ未契心、彼ノ諸大老ノ眼晴、何レモ師ニ劣り、師大憍慢興シ

而問_テ云、_ク和尚為_レ甚不_レ着_ニ班衣_ヲ答_テ云、_ク(5丁裏)今諸方_ノ無鼻孔之長老、名利_ヲ不_レ捨_テ

皆_ナ隨順_{シテ}着_ク班衣_ヲ彼寺_ニ依_レ為_レ異_シ余_ワ不_レ着_ケ徐_チ歸國人天化導_{セバ}班衣_ヲ可_レ着_ク是_レ

亦_タ無_レ妨吾意_ノ功_{ナリ}也、

一來日可_二帰朝_一定_リ給_フ夜、得_テ碧岩集壺部繕写_{シヤス}鷄鳴之後、白衣老翁來乞_フ加

助_{オシコトヲ}師許_{ルス}之_ヲ末_タ到_ニ明相_ニ竟_{フワン}書功_ニ和謂_フ一夜碧岩是_一在_ニ賀州大乘寺_一師投_レ

筆問_ヲ其_ノ性_名則_チ云、_ク日域男女元神_{ナリト}也、條然失_{シテ}其_ノ所在_ニ因_テ知_ル白山明神_一矣、

依_テ之_{レニ}今_ニ和尚付_レ師、以_ニ美蓉楷祖_ノ法衣、寶鏡、三昧、五位顯訣并自贊頂相_ニ曰、_ク

一如淨和尚付_レ師、以_ニ美蓉楷祖_ノ法衣、寶鏡、三昧、五位顯訣并自贊頂相_ニ曰、_ク

汝_チ以_ニ異域_{イキノ}人_ヲ授_レ此_ノ衣_ヲ為_ニ法_ノ信_ト帰_リ國_ニ布_レ化_シ廣_ク利_ニ人_ヲ天_ヲ莫_レ近_ニ國_ヲ王大臣_一莫_レ住_ニスルコト

人_ヲ可_レ為_ス伴_ヲ須_ク須_居_ニ深_山幽_谷不_レ要_ニ雲_集、閑人_ヲ多_{キハ}虛_ノ不_レ如_レ少_{キハ}實_ノ撰_{エラヒ}取_テ真_ノ個_ノ道_ヲ

人_ヲ可_レ為_ス伴_ヲ洛_ヲ須_ク須_居_ニ深_山幽_谷不_レ要_ニ雲_集、閑人_ヲ多_{キハ}虛_ノ不_レ如_レ少_{キハ}實_ノ撰_{エラヒ}取_テ真_ノ個_ノ道_ヲ

乎、依_ニ此_ノ示_ニ先祖王位、富貴_ヲマズ、京城ヲ離_レ越_シ古_ニ佛_ノ之家_ヲ風_ヲ勿_レ令_ニムルコト

集会裡衆二十』(6丁表)有余人ニ不_レ滿_テ飢寒_{カシ}不_ニ忍_ヌ堪_ヘ真_ニ實_道心_ヲ之人_ヲ為_{シテ}伴_ト、

佛法修行シ給_フ也、

一宝慶三年冬、解纜發舶、天寒白雪霏霏、忽有神人現船舷、而云、弟子_ハ是_レ。

竜天也、在ニ支那ニ曰招宝七郎大権修理菩薩ト知下師ノ佩祖師一還郷ニ隨レ師ニ護
 正法師云汝能易形乎乃化為三寸計白蛇延縁入鉢觀世音菩薩ノ事
 風俄惡波濤怒鼓一船無人色師誦普門品忽補陀大士乘中屈蟠亦海
 上師自圓其像系二贊干其上而梓之世号一葉觀音少頃風波浩如也
 以故孤帆無レ恙速着肥之後州河尻実安貞元丁亥年也河尻大渡ト云
 処居住于今在寺号三日山如來寺三日山号スルコトハ師歸朝在テ三日之内
 此寺建テタリトテ万民申伝後此寺義尹和尚住シ給フナリ
 一師帰朝時伝來物积迦文仏之茵褥四祖道信香合六祖惠能念珠洞
 山頂相其余鬱多羅僧安陀会鉢多羅竹笠払子等甚多
 一人王八十六四條院ノ号天福元癸巳年弘誓院正覺禪尼等相攸於宇治
 音導利院興聖宝林寺即請師為斯開山第一祖也正法眼藏第二奥書
 云天福元年冬之安居在觀音導利院示衆云此觀音導利院興聖宝
 林寺深草里極樂寺也故照宣公草創之処也云文曆元年此寺御居
 住也此節開堂演法在玄侶奔湊如水赴寧王公大臣仰止高風皆尽
 師敬之節懷奘僧海詮慧等師神足大竜象也由是法席之盛卓冠天

下由良覺心法燈國師之事聞師ノセシ燐化クワツ來參受シテ磋磨マサマサ之功ヲタ又受ク菩薩ハタリ、見元号アマニ號マサニ積書ムルト

一永平二代奘和尚ホトトウ之行狀ノシテ記云、文曆元甲午年、見元和尚於深草精舍改シヤウジヤニムルト

同四條院之号衣ヲ云、

一喜禎元乙未歲、二代奘和尚授ケ大事一給、隨聞記第五云、クロウ月晦日、懷奘和尚於興聖寺充首座即小參次康払子請、奘和尚此年卅九歲也シモニ月也、

在被記(7丁表)

一同二丙午年、此年ヨリ宇治深草居住記録アリ、今案ズルニ、此年開堂タルト見エタリ、自此マタリ年已前ヲバ、不被記ト覺フ

一隨聞記云、有ル

(7丁表)

時予ヲ侍者ニ請シテ云、人ヲ慙ベクンハ明眼ノ人ヲ可レ慚ツワ、予レ在宋

衆中具眼人在テ國人トシテ大叢林之侍者タランコト、國ニ如レ無キカ、

辭ス、其故ワ和國ニキコエンモ學道ノ稽古タメモ大切ナレトモ、

人難ズルコトアラン、尤可モ懸トテ以此旨ヲ辭淨和尚國ヲ重人ヲ慚

ルコトヲ許シテ更ニ請ゼサリシ也、

一同年五月一日、義尹和尚ニ大事ヲ授ケ給ト云、實仁治三年人王八十六四條院之号壬寅也、

三拜、遂立起捧語錄一薰香而頂戴、即下座與大衆同三拜、

一同年十二年十七日、且那波多野雲州大守義重之家ニ至テ説法、正法眼藏廿二全機ノ卷奥書ニ云、余時仁治壬午十二月十七日在雍州六波

『(7丁裏)羅密寺測前雲州刺吏幕下示ストアリ、

一宇治寺ニ御住之間ワ自天福元癸巳年至二寬元元年癸卯迄十一箇年也、此深草寺王舎城近月郷雲客花族車馬往来不絶、隨縁説法、大家一百余受菩薩戒弟子二千有余也、此輩度生方便仏祖古風我望所、安閑無事也トテ常山林泉石便宣求給於是、一時ノ公郷施卓錫地延師者、一十三人也、爰越州波多野雲州大守藤原義重帰敬有年語レ師ニ吾領内越州吉田郡之深山ニ安閑之地在リ、在ニ御下向一度生説法アラバ、一国之運亦ワ当家之幸ナルベシト堅請師、師云、我先師天童如淨古仏越州人ナル故、越國之名ヲ聞ケバ懷シ、吾望所也即下著也、正法眼藏卅二卷、奥書、寛元癸卯年夏、深草御立在リ、志比之庄下向在ルベシト御返事在寛元元年、夏、深草御立在リ、志比之庄下向在ルベシト御返事在寛元元年夏、深草御立在リ、志比之庄下向在ルベシト御返事在寛元元年七月初一日、在ニ越宇吉峯頭ニ欲建衆云、波多野雲州大守与并南都左金吾禪門覺』念相共寺ヲ欲建

立庄内至山水宣便尋則一野之東傴松峯下ニテ寺庵相應ノ地ヲ得テ歎喜同年閏七月十七日雲州大守自手山夷地曳吉峯ノ茆舎ヲ此ノ地エ移シ給フ、

一寛元二甲辰歳吉峯与レ寺間ヲ往来シ給フ也同年二月廿五日天神宮參籠在リテ天神之題スル月夜見梅花之詩ヲ和韻被レ成本韻斎衡二甲戌人王五十五文德天皇号江歲春天神十一歳シテ述志其詩曰、

月ノ耀如晴雪、
可レ憐金鏡転、
庭上玉芳馨、
梅花似照星、

師和作云、

月ノ耀如晴雪、
可レ憐金鏡転、
庭上玉芳馨、
梅花似照星、

春松何怕岩冬雪、
天上人間三界裏、
眼睛鼻孔見幽馨、
是故吉祥中最美、

春松何怕岩冬雪、
天上人間三界裏、
眼睛鼻孔見幽馨、
是故吉祥中最美、

一同年

七月十八日開堂說法云此山名吉祥山寺号大仏寺則作

春松何怕岩冬雪、
天上人間三界裏、
眼睛鼻孔見幽馨、
是故吉祥中最美、

諸仏俱來入此處

諸仏如來大切徳、
諸仏俱來入此處

諸仏如來大切徳、
諸仏俱來入此處

皆諷經之間モ山神現形、
龍神降雨、
興雲其祥、
雲如蓋連綿峯頭、
師為

頌云、

諸仏如來大切徳、
諸仏俱來入此處

一同年

七月十八日開堂說法云此山名吉祥山寺号大仏寺則作

諸仏如來大切徳、
諸仏俱來入此處

(8丁裏)

吉徵乃山号二吉祥亦吉祥者是帝祚宮之名、仏成道之時、吉祥草敷給
所以也、今地夷伽藍建立、處最吉祥也、檀那雲州大守一心隨喜、此法
筵參詣之人數前大和守清原真人、源藏人野尻入道參阿左近將監
安主公等參行、事說法後師語、雲州曰、這一片地、主山北高案山南
低東嶽連白山神廟、西溪接碧海、龍宮峯巒重疊、人煙阻隔、寒靈勝之
區也、其上予在宋時、天童坐禪之法要三十餘ヶ条示給、其一云、莫大
海見可青山溪水觀此地、應此ノ記、林泉之風景所望亦足、タシス乎
丁表珍味必盛、
於良器亦香稻必可、満足、
四維南北勝地、エラフ至此自體、マヌ云、
一寛元四年六月改大仏寺、曰永平寺、意取者、仏法至中國、在漢明帝
永平年中、師自以爲正法、東傳故舉其年號以名寺云、有師山居偈、
來祖道我伝東句見于後、
一師或時示衆云、食須以知足、
衲僧眼睛也ト給、今此ノ意註スルニ、食ハ足ルト知レトハ、落葉杯
食其日命ヲ養、是上望莫レト也、衣僕約ナルベシトハ、紙キヌ斗、
一師或時示衆云、食ハ須以知足、
衲僧眼睛也ト給、今此ノ意註スルニ、食ハ足ルト知レトハ、落葉杯
食其日命ヲ養、是上望莫レト也、衣僕約ナルベシトハ、紙キヌ斗、

テモ、寒ヲ防クベシト也、亦示云、今見諸方、道心僧稀、求名利僧多、不
慕ニ仏法、願ニ一心朝堂、此類皆誰是外道不識也、

一寛元二年九月一日、法堂功成有開堂、法会男女來集事、一千余人也、

云、』

(9丁表)

一同月七日、宇治之興聖宝林寺木犀樹到来、義準上座送到而今孤雲
之前種レ之ト云、

一同年霜月三月、僧堂上棟、此時天竜小雨小風降吉例也、建立信心檀

那、左金吾禪門覺念、庫下南簷鹿皮令敷行事子息左兵衛尉藤原時

証、庫下西簷有テ行事スト云、師ハ庫下前在上棟見給大工弊捧其色

五色ナリ也、三拝已畢馬二疋引手物已下皆賜鍛治、杣人壁塗皆賜馬壺

疋ツ、也、其外見聞之男女一千余人、白餅一枚ツ、賜一年中ニ法

堂僧堂共功成、然トモ師在世ニハ七堂未調ト見行状ノ記云、土木未

備堂閣僅両三ト在也、

一寛元三年己亥年三月六日始示正法眼藏、同年四月結夏、上堂之前後、天

華ア乱墜而、師法席及僧座、茶盡之上、迄散入、古今未曾此有瑞』

(10丁表)

相一ト

記録セリ、永平寺回^{クワイ}之後、殿堂建立在^テ、觀応二辛卯年四月廿一日、開堂供養、第六世曇希和尚^{ドンキ}陞座說法、師在世、威德^ヲ揚^{ヨウアル}其^ニ中此花事、六世^ノ之自筆^ニ而是書置給^フ也、
一寛文^(マ)四年六月十五日上^{ヨリ}堂、大仏寺^ヲ稱^ス永平寺^ト、意取在^リ前^ニ知事清規此、
日行^(ヨリ)同八月六日示^{シテ}衆^ニ云、永平示^ス庫^院、禪苑^ヲ清規^ヲ齋^レ僧^ノ云、法者以^テ敬^フ為^ム、
宗、遙西天竺之法正伝シ、近震且國之法正伝スルニ、如來及^ビ佛滅度、
後、或^ハ諸天ノ供仏、并僧奉獻シ給^イ、或^ハ國王ノ王饌僧供養^シ奉^リ、其外長者居士、家ヨリ奉^{ルモ}在^リ毗闐首陀家奉^{ルモ}有^リ、如^レ此供養共極重ノ敬礼用^イ、
至極ノ尊言存^{シテ}敬^イ奉^ル、飯饌等之供養具造作スル也、深意今遠方之、
深山共、寺院ノ香積^{シヤク}局^ノ其^ノ礼儀^ヲ、言語親^ク正伝スベキ也、天上人間佛法、
之習覺^{ナリ}也、謂粥御粥^{シユクバミ}斎^{サイ}トモ申スベシ、
時^ヲトモ申スベシ、時^{トキ}ト申スベカラズ、米白メ^(10丁裏)参^{マイラ}セヨト申スベシ、斎^{サイ}ト申スベシ、
米ツケト云ベカラズ、御菜ノ御レウノナニ物エリマライラセヨ申スベシ、
スベシ、米アライ参^{マイラ}スルヲバ、淨米シ参セヨト申スベシ、米カセト申スベカラズ、御汁ノ物シ参セヨト申スベシ、汁ニヨト申スベカ
申スベカラズ、御汁ノ物シ参セヨト申スベシ、

ラズ、御糞シ参セヨト申スベシ、御カラシマイラセタルト申スベ
 シ、汁ニエタルト申スベカラズ、御粥ハ熟セサセ給タルト申スベ
 シ、斎粥入奉コト、調度皆ナ如ク、敬フベシ、不レ敬ワ必殃過招功徳得無、斎
 粥調参ラスル時、人ノ息ニテ米菜及何レノ物ヲモ吹クベカラズ、
 縊イ乾タル物ナリトモ、襷袖触コト莫レ、頭面フレタル手、未シテ洗斎
 器及斎ニ手触事莫レ、米ワエリ参ラスルヨリ、乃至飯羹ニソム
 斎器及斎ニ手触事莫レ、米ワエリ参ラスルヨリ、乃至飯羹ニソム
 キ参スル経営ノ間ニ、身ノカユキ処力キテワ、必ズ其手ヲ洗フ也、
 斎粥調エ参スル処ニテ、仏經ノ文語諷誦スベシ、世間之語、新穢ノ之
 話言ベカラズ、凡米菜』(1丁表)
 ト申スベカラズ、斎粥ノマシマサン処ヲ過キニワ、僧衆行者シ
 奉ルベシ、靈菜サイト申スベカラズ、斎粥ノマシマサン処ヲ過キニワ、僧衆行者シ
 護惜スベシ、他事ニ用ユベカラズ、在家ヨリ来ラン輩ノ米、手ヲキ
 ョメザランニハ、手ヲ触レサスベカラズ、在家ヨリ来ラン輩ノ米、手ヲキ
 ン程ワ犯スベカラズ、斎粥調エ参センズルニワ、調度子ンコロニ
 等、イマタキヨメズンバ洒水シ行香シ、行水行火シテ後、三宝衆僧子
 ヨメザランニハ、手ヲ触レサスベカラズ、在家ヨリ来ラン輩ノ米、手ヲキ

ニ奉ルベシ、現在大宋之諸山等ニハ、若シ在家ヨリ来レル、饅頭、乳
 餅、羹ヨウ餅等、カサ子テムシ参セテ、衆僧ニ奉テキヨムル也、イマタム
 サセザレバ奉ラサルナリ也、之レハ大ノ中チノ中小ヲ語ルナリ、此大旨ヲ得テ、庫ヨ
 院香積ク行フベシ、万事非義(ママ)ナル事莫レ、
 永平庫院、』

右条々、仏祖之命脈ミヤウ、衲僧之眼睛ナリ也、外道未ドク知天魔モ不レ絶ヘル勘カルニ唯タ仏子ノミチ乃チ
 能ク伝ヘン之、庫院之知事、明察シテ而莫レ失フコト、
 開闢沙門道元判、
 灵梅院開基且那勝義以筆跡ヲ写レ之レヲ勝義ハ
 世且那之兄屋敷名シキ字ノ始メナリ也、
 一寛元年中後嵯峨院聽師テ道誉ヨ、タママフ錫紫方ホウ袍ボウ、
 紫衣イ命重キコト重キコト、
 力辞ジスレドモ不レ許ユルサレ謝ス、
 上喜歎ダンスルコト久シト之シト云ク、
 却テ被ル猿エシ鶴クワニ笑ワ、
 永平雖ニ山浅シト、
 睿恩エイ獻ケンジテ偈ヲ云ク、
 勅命チヨク重キコト重キコト、
 未有タマ上人号シテ也是タマ時本朝タマ師シテ再三

一 寛元五丁未年正月十五日、布薩時、師說戒給五色之彩雲、方丈正面、障子立半時斗在聽聞之道俗アマタ奉ル見レ之其中河南庄中郷ヨリ
 参詣人此子紬(ママ)為後証トテ以ニ起請文申置其文云、
 寛元五丁未正月十五日、說戒之節、然日自未之始、至申末半分、正面、障
 子有五色光聴聞之貴賤拝之其中自吉田河南庄中郷企参詣奉ル見
 之者ニ志比庄方丈不思儀日記之事、
 十四人也、但說戒之日雖多相當此日參詣之條、拝令二然放光也、此条
 為虛言、永令墮在三途、仍自今已後、為伝聞隨喜記置之状如作此、
 正本者、永平開山宝函之中在之、
 永平寺二代和尚以自筆註之云、
 当山開山堂頭和尚就方丈布薩說戒之時現五色之瑞雲、
 明障子彼障子經年月一雖破損旧骨紙等當寺之(12丁裏)為重宝而安置方丈之天井上於後々可重寶之、
 其現瑞日時等者記在別紙令暫安置方丈之天井上於後々可重寶之、
 之者也此正本者在永平宝藏文平四年九月廿二日記之小子

一 宝治元丁未年八月三日、鎌倉御下向、之事、西明寺殿法名道宗、堅^{タケル}請被^{シヤウシル}
申間^{タカル}在ニ御下向^ト、時頼^{西明寺殿也}受^ケ菩薩戒^{ハラ}執ニ弟子之礼^ヲ給^フ、其外^カ道俗男女、受^{ケルノ}戒^ヲ之
衆不^レ知^ラ數^ヲ云^ク、其上^ヘ堅^{タク}師留^メ申シ、建立^{シテ}寺院^ヲ長^ク開山祖師^ニ可^キ仰^{アヲキ}申^ス旨再
三給^イケレドモ、越州有^ニ院之旦那^{タシナ}堅^{ジシテ}辭去^リ鎌倉^ヲ給^フ、越前国志比^庄永平
寺^江帰^ム山有^レ之也、鎌倉建立在テ請^シ師被^ル申^ト寺^ハ則^チ今建長寺^{ナリ}也、師辭去^リ給^{フニ}
依^テ蘭溪道隆^{ケイリウ}禪師^ヲ請^シ被^レ申^ト開山^ト仰^ギ給^フ也、師越前御帰山之後^チ時頼^{西明寺殿也}為^レ遂^{ニシカ}
願心^ヲ越前國以^ニ六条保^シ而^テ永平寺^江寺領^ニ、寄進有^リケレドモ師ツイ
ニ不^レ受^ケ是^ヲ玄明首座ト申僧[、]』^(13丁表)寄進状[、]之御使^ヲセラシ^{ナリ}也、彼ノ保御^ヲ
寄進^ヲ大歎^{クワソ}喜^キ有^リ衆中^ヲ觸^レ廻^{メクリ}給^フ、師聞^レ之^ヲ給^フ此ノ悦^{エツ}喜^キ之心中^ヲタナシト
テ、則^チ時寺^ヲ擯出^シ給^フ、是ノミナラズ、玄明首座[、]坐禅セラレシ、僧堂ノ
床縁^ヲ截^リ取^リ、地ヲ深^ク掘^テ捨^給也、前代末^ヲ聞^ム之事^{トモナリ}也、此玄明生羅漢
ト申シ伝^ル仁^{ナリ}也、師入滅^マ後百卅年斗^リ、伊豆国箱根山^ニテ、行脚^{キヤ}之
僧ニ行^キ逢^テ云^ク、我^ハ是^ヲ越前國永平寺ニ住^{ミシ}、玄明ト云^者也トテ、師
ノ在世ノ事ヲ物語^シ、竹杖ニスガリ立^チ給^フ、其ノ行脚[、]之僧、永平寺ニ
テ語ルト申シ伝ル也、

道元禪師行業記上(伊藤)

一一六

一建長開山蘭溪和尚書到其文云、	悟人天道起居清勝道隆宋國晚生謬無知者、』	撰序金風普燭玉宇高寒、	恭惟坐鎮名利敬、
道隆和尚悚息上啓、	策人天道體起居清勝道隆宋國晚生謬無知者、』	序金風普燭玉宇高寒、	惟坐鎮名利敬、
大仏堂禪師撰序金風普燭玉宇高寒、	悟人天道起居清勝道隆宋國晚生謬無知者、』	惟坐鎮名利敬、	(13丁裏)藏拙衆底動止亡、
悟人天道起居清勝道隆宋國晚生謬無知者、』	悟人天道起居清勝道隆宋國晚生謬無知者、』	惟坐鎮名利敬、	(13丁裏)藏拙衆底動止亡、
策人天道起居清勝道隆宋國晚生謬無知者、』	策人天道起居清勝道隆宋國晚生謬無知者、』	惟坐鎮名利敬、	(13丁裏)藏拙衆底動止亡、
亦師蘭溪和尚悚息上復、	亦師蘭溪和尚悚息上復、	亦師蘭溪和尚悚息上復、	亦師蘭溪和尚悚息上復、
上啓大仏堂禪師撰序金風普燭玉宇高寒、	上啓大仏堂禪師撰序金風普燭玉宇高寒、	上啓大仏堂禪師撰序金風普燭玉宇高寒、	上啓大仏堂禪師撰序金風普燭玉宇高寒、
宋朝西蜀人事寓太宰府傳多古円覺寺比丘道隆謹呈、	宋朝西蜀人事寓太宰府傳多古圓覺寺比丘道隆謹呈、	宋朝西蜀人事寓太宰府傳多古圓覺寺比丘道隆謹呈、	宋朝西蜀人事寓太宰府傳多古圓覺寺比丘道隆謹呈、
恐到冬尽同諸兄弟柩衣往丈室拝謁未間功德為大法崇重不宣、	恐到冬尽同諸兄弟柩衣往丈室拝謁未間功德為大法崇重不宣、	恐到冬尽同諸兄弟柩衣往丈室拝謁未間功德為大法崇重不宣、	恐到冬尽同諸兄弟柩衣往丈室拝謁未間功德為大法崇重不宣、
上啓大仏堂禪師撰序金風普燭玉宇高寒、	上啓大仏堂禪師撰序金風普燭玉宇高寒、	上啓大仏堂禪師撰序金風普燭玉宇高寒、	上啓大仏堂禪師撰序金風普燭玉宇高寒、
道元咨目悚息上復、	道元咨目悚息上復、	道元咨目悚息上復、	道元咨目悚息上復、
几下	几下	几下	几下

(14丁表)

(14丁裏)

円覺寺堂頭和尚大禪師、前即辰孟冬輕寒、伏惟尊候神相万福、道元二十歲前至曾大宋一掛錫太白、一瞬間末歷叢林一族來本國蓋乃業風之所吹也、行解俱闕、守愚遇日矣、近年庵千深山閉戶而欲終殘命矣、去冬詮慧惠達之兩禪人、雲遊之次敬領於和尚之書、薰香見欣感惶恐、宛是寒谷溫至也、本欲拜謝詣寺、干今末遂鄙願矣、不期今年八月被檀越勾引而忽到相陽鎌倉郡東西山川二千余里嚮風之到、一日三鼈承聞既到王城時之運也、令幸也、迢航海而來、一下如意普通遠年之儀、祇園之風所扇者、曹溪之流能伝、幸如草々、伏冀慈照、』

宝治元年孟冬比丘道元悚息咨目上復

一

円覺寺堂上和尚老禪師尊前

建長開山大覺禪師ハ弘安元戊寅七月廿日示寂也此狀ワ円覺寺当住之内ニ寛元四年三月暮傳多エ御下向在テ御座在ル時覺妙房ト申人師之法語ヲ見奉ツル也其ノ冬師ノ会裡ノ僧詮慧惠達ノ兩僧行脚ノ次而傳多エ行其時キ状ヲ大仏寺江為レ被寄ト見エタリ、宝治元年丁未十月日付也其時分大覺禪師ハ傳多上洛有リテ在京

ト見エタリ、宝治元年之返書、去冬ト在ルワ、寛元四年冬ノ事也、
 一宝治二戌申年三月十三日自ニ鎌倉帰寺アリテ、同十四日上堂云、山僧
 昨年八月初三日出レ山趣ク相弔鎌倉且那俗弟子ノタメニ説法令メ今月
 昨日帰寺今朝陞座、這一段之事、或有レ人為ニ疑著、涉ニ幾許ノバクノ山川一
 子説法似ニ重レ俗輕ア僧、此間文略之其末句ニ、山僧出去半年余猶若シヨ
 今日帰山雲喜氣受山之愛甚於レ初、
永平広録三卷在レ之、

一同年四月始ヨリ、十一日十二日迄異香殊勝ナルコト、僧堂ノ内外

薰ジ渡師自筆ニアラハシ置レタリ、
 一本州ニヒトリノ婦人アリ、其性酷妬、已ニ死シテ化レ蛇師其業ノ深
 キコトヲ憐ミ給イ、授ニ菩薩戒給フ、便チ現ニ男子形騰レ空去ルト云、

一宝治三年正月十一日、羅漢供法会在レ之、此時供養ヲ、請ケ給ベキタ
 メニ、羅漢光リヲ放ツテ山奥ヨリ法会ノ場、有ル降ニ臨于長松、上ニ
 歎ニ未曾有勝会此ノ長松ヲ時キノ人呼ンテ曰ニ羅漢松ト、
テ(15丁裏)
 大唐者天台山五百有リ生羅漢我朝者此山中有ニ生羅漢師以ニ自筆一書

置キ給此記録之正本者、且方重書箱在レ之、

一 同 年 正 月 十 一 日 ヨ リ、衆 ジュ
十 一 日 廿 一 日 也、後 生 晚 学 ガ ク
集 来 シテ 衆 寮 湯 ヲ 吞 了 フ ツ テ
愚 人 ノ 耳 ニ 落 ル 様 ニ 示 シ 給 フ 也、

一 師 五 百 年、之 際、此 吉 祥 山 ヲ 不 レ 離 レ ト 云 フ、御 誓 約 有 リ ト
九 月 初 十 日 示 衆 シテ 云 ク 徒 リ 今 日 一 尽 末 来 际、永 平 老 漢 カン ツ ヨニ
当 山 ノ 之 境 ニ 雖 モ 蒙 ニ 国 王 ノ 之 宣 セン 命 メイ ラ タ 亦 誓 ネ カツ
隔 ハタ 精 ジヤウ 進 ジン 經 ケイ 行 ゴウシテ 積 シヤク 功 ルイ 累 ドクオント ハナリ
佛 祖 窟 クツ 裡 リニ 也、其 後 永 平 打 ニ 開 大 事 シテ 坐 ニ 樹 下 ニ 破 ヤブリ
宣 ベント ニ 此 ヨ 以 レ 偕 ヲ 説 テ 云 ク 魔 ハジユンラ 波 旬 ノ
(16丁表)
成 ナンモ 最 モソトモ 正 觀 ヲ 欲 シテ 重 テ

一 建 長 二 庚 戌 年、開 闢 ヒヤク 旦 那 雲 州 大 守 ヨリ 一切 経 ヲ 写 ヲシ、永 平 寺 シテ
云 状、到 来 ノ 日 上 堂 曰 ク 古 蹤 セキウ 多 在 リ 山 ニ
古 仏 修 行 多 在 リ 山 ニ 春 種 シウ 冬 夏 亦 夕 居 レ 山 ニ
永 平 欲 シテ 慕 ニ 古 蹤 セキウ

拳 僧 問 フ ツ ワ 投 子 シ 一 大 藏 教 還 カエツテ 有 リ ヤ 奇 キ 特 ジ サ 事 ジ ザ 也 無 イナヤ 投 子 云 ク 演 ニ 出 大 藏 教 ヲ 投 子 古
云 状、到 来 ノ 日 上 堂 曰 ク 古 蹤 セキウ 多 在 リ 山 ニ 春 種 シウ 冬 夏 亦 夕 居 レ 山 ニ
古 仏 修 行 多 在 リ 山 ニ 春 種 シウ 冬 夏 亦 夕 居 レ 山 ニ
永 平 欲 シテ 慕 ニ 古 蹤 セキウ

(16丁裏)

正月五日子之時、花山院宰相入道希玄

靈山院

今南都左衛門之庵室也

也

ニ仏法談儀

タシギマ

候処、鐘声二百声斗リ、其響ワ京之東山清水寺之鐘カ若者法勝寺、
之鐘カワ聞エ候、坐ニ尊ク覺候、宰相モ不思議ノ靈地ト隨喜シ入
テ候キ、入道具セラレテ候、乳人コノ右近藏人入道經資法師、是モ

不聞カ候、其外亦十二三人侍七八人候モ皆不レ承候、
一建長四壬子年夏之頃ヨリ微ヒ病起疾シマシマス、最後ノ之教誨ニ、正法眼藏八

大人覚之卷也、此教誨仏ノ之遺教經ヲ本トシテ遺言有ルト見エタ
リ、

「一者少欲、此ノ心ワ、名利ヲ求ル事莫レ、無欲無レ愁イ諸功德自生ズル也、
二者知足、世間ノ苦ヲ除ント思バ、富貴ノ人モ其ノ生レツキアワレミ、上ヘ
モノ望ミナカレ、我ガ身ノ上ソ満足ト思ワバ、更ニ不足アラザル也、
三者樂レ寂靜、人間之事ヲ捨て、山林深閑居スレバ、諸天萬人ニモ敬キヤウ

「四者勤精進、出家タル人吾ガ勤行ヲ能クツトムレバ、求ル処皆不レ叶
重セラルム也、

事無キ也、
「五者」不_フ忘_{モウ}念_チ、
惱_ヲ自_リ不_レ來_ラ也、
善智識_ニナラウト思_バ一念モサシヲク事ナカレ、其時_ハ煩_{ボシ}
 「六者」修_{シユ}禪_{ゼン}定_{デウ}、心_ヲ閑_{シツカニ}修_メ坐_{禅_{セヨト}}此ノ時_キ自世間無常道理得ル也、
 「七者」修_{シユ}智_シ慧_ス、若_シ智_シ慧_ス有ル人ワ、万ノ物ヲ貧_{マコ}ル事莫_レ此理能_ク察失スル
 事莫_レト也、教_{フシエ}エノ如クナレバ、暗ニ_{トモシヒ}灯_ヲ得_ルガコトク也、
 「八者」不_フ戲_ケ論_{ロン}、此ノ心ハ、何事モタワフ_レ論ズル事莫_レト也、戯_{タフフ}ルレ
 バ心乱ルム也、閑ニシテ可_レ死_ヌ事_ヲ思_エト也、此八大人覺_ノ理_ヲ不知_ラ佛弟_也、
 子不_レ有_ラ彼_レ仰_{ト云}『
 撰_{セシスルカ}、仮_{ナノ}名_{ナノ}正法眼藏等、皆_ナ書_キ改_メ并_フ新草_ヲ加_ヘ都_{スベテ}慮_{ヲモハカルニ}
 二代和尚云、右本者先師開山和尚、最後御病中之御草案_{アシ}也、此ノ後御病漸く重_{ゾウス}増_{ヨツテ}、
 取_{コマ}以_{ユニ}此卷_ハ十二卷_ニ也、此ノ後御病漸く重_{ゾウス}增_{ヨツテ}、
 案_ヲ尤_モ所_レ恨_{ウラムル}也、若_シ奉_ル恋_{レシニ}暮_{ボシ}先_ヲ最_ハ後_ノ之_ヲ教_ケ勅_{チヨク}也、我_レ等_ヲ不_フ幸_{カウニシテ}而_レ不_レ抨_シ見_オ一百卷_ノ之_ヲ御_ヲ草_也、
 最_ハ後_ノ教_ケ勅_{チヨク}且_{カツハ}先_ヲ師_ヲ最_ハ後_ノ之_ヲ遺_ケ也、
 教_ケ也、如_イ今_マ建_ム長_ノ七_年乙卯_ノ七_月十四_日、令_{シテ}尊_シ此_レ积_ヲ草_也、
 (18丁表)
 之_ヲ時_キ此_ノ卷_ハ十二卷_ニ也、此ノ後御病漸く重_{ゾウス}増_{ヨツテ}、
 取_{コマ}以_{ユニ}此草案_{アシ}等_ヲ先_ヲ最_ハ後_ノ之_ヲ教_ケ勅_{チヨク}也、我_レ等_ヲ不_フ幸_{カウニシテ}而_レ不_レ抨_シ見_オ一百卷_ノ之_ヲ御_ヲ草_也、
 撰_{セシスルカ}、仮_{ナノ}名_{ナノ}正法眼藏等、皆_ナ書_キ改_メ并_フ新草_ヲ加_ヘ都_{スベテ}慮_{ヲモハカルニ}
 二代和尚云、右本者先師開山和尚、最後御病中之御草案_{アシ}也、此ノ後御病漸く重_{ゾウス}増_{ヨツテ}、
 取_{コマ}以_{ユニ}此卷_ハ十二卷_ニ也、此ノ後御病漸く重_{ゾウス}増_{ヨツテ}、
 案_ヲ尤_モ所_レ恨_{ウラムル}也、若_シ奉_ル恋_{レシニ}暮_{ボシ}先_ヲ最_ハ後_ノ之_ヲ教_ケ勅_{チヨク}也、我_レ等_ヲ不_フ幸_{カウニシテ}而_レ不_レ抨_シ見_オ一百卷_ノ之_ヲ御_ヲ草_也、
 最_ハ後_ノ教_ケ勅_{チヨク}且_{カツハ}先_ヲ師_ヲ最_ハ後_ノ之_ヲ遺_ケ也、
 教_ケ也、如_イ今_マ建_ム長_ノ七_年乙卯_ノ七_月十四_日、令_{シテ}尊_シ此_レ积_ヲ草_也、

書ニ写義演畢、同二校之、懷奘記レ之、正本ノ之奥書ニ云、建長四年之暮、建長五年之正月六日、書ニ永平寺自古ヘ此卷拝見スル輩ワ、催感涙一住持モ、門派流通退転スベカラズト云云、此卷多ニ依テ、名目斗、戴レル者也、(18丁裏)

卷キヨ閱スル時ヘ、挙声愁歎給フ也、於末代ニ此ノ遺言守ラバ、宗風永ク扇アヨリ

建長五年七月十四日、二代懷奘和尚永平寺入院、同八月初五日、京城江御上洛在レ之也、

師就ニ而御病赴檀那雲州大守ヨリ、御上落在在レトシキリニ望ミ

申間奘和尚御伴有ル也、且医師ニモ逢セ可レキ申タメ也、御上洛日頃被レ

并御詠歌有リ之頌曰、ク

十年喫飯永平寺、十ヶ月來臥病床、

討フ人間暫出嶠、如レ來三授手見ニ医王、ニモ

丹波路ヨリ御上洛有ルト云也、御詠歌云ク

△草ノ葉ニ門デセル身ノ木部山、雲空ニ在ル、心地コソスレ、

御入洛アリ、高辻西洞院俗弟子覚念ノ私宅、先宿シ給フ、御違例無レシ

増減、白黒ノ衆隨テ礼無レ虚日師一ニ真慈隨機設化、

俗僧ノ事

上皇使官医昧病、語笑如平時、或日室內往行低聲誦云、若於園中、若於深草院也。
 於二林中、若於樹下、若於僧房、若於白衣舍、若在殿堂、若在山谷曠野、是中皆應起塔供養、取以者何、當知是處即道場、諸仏於此得下阿耨多羅三藐三菩提、諸佛於此而般涅槃、誦畢後此經文、轉法輪於諸佛於此而般涅槃、誦畢後此經文、
 文、軀而面前之柱書付給、亦妙法蓮華經庵ト書付留給、此經文遊シタル心ワ、今俗屋入滅有程昔日諸仏モ如レ此也、証引給也、
 建長五年、八月廿八日、寅刻及テ、澡浴罷整衣索筆書偈云、五十四年照第一天打箇躡跳触破大千嘵、渾身無レ処覓活陷二黃泉投筆怡然坐化、朝野訃聞無レ嗟動者、師以正治二年庚申正月二日一生世寿
(19丁裏)
 然五十有四、僧臘四十有一也、就中雲州太守義重天仰地伏、五十四年之早逝、惜給事無比類、覓念其外僧俗等、悲歎之声不レ絶、奘和尚半時計、死ニ入給、師入滅了洛陽天神中之小路、草庵先入奉調被成、
 雲州大守可然所尋東山赤辻小寺ノ在ルニ龕移給イテ、依法ト喪成、
 九月六日、説利羅収出京同日酉刻越州志比庄吉祥山到、
 日申刻ニ、於方丈入般涅槃之儀式ノコトク、茶菓珍膳灯燭ヲ備致、
 後此經文遊シタル心ワ、今俗屋入滅有程昔日諸仏モ如レ此也、証引給也、
 建長五年、八月廿八日、寅刻及テ、澡浴罷整衣索筆書偈云、五十四年照第一天打箇躡跳触破大千嘵、渾身無レ処覓活陷二黃泉投筆怡然坐化、朝野訃聞無レ嗟動者、師以正治二年庚申正月二日一生世寿
(19丁裏)
 然五十有四、僧臘四十有一也、就中雲州太守義重天仰地伏、五十四年之早逝、惜給事無比類、覓念其外僧俗等、悲歎之声不レ絶、奘和尚半時計、死ニ入給、師入滅了洛陽天神中之小路、草庵先入奉調被成、
 雲州大守可然所尋東山赤辻小寺ノ在ルニ龕移給イテ、依法ト喪成、
 九月六日、説利羅収出京同日酉刻越州志比庄吉祥山到、
 日申刻ニ、於方丈入般涅槃之儀式ノコトク、茶菓珍膳灯燭ヲ備致、

(20丁表)

供養、法事勤行孝礼悉在之塔者本山之西隅今承陽庵是也、覺念其後妙法蓮華經庵遊シタル柱、鑿拔越州エ下今南都郡月尾山下始テ塔婆ヲ建立此柱以テ則中心ト成毎日供養スト云今ノ別院是也、覺念ワ今之北村之先祖也ト云云、』

「師御入滅已前中秋之御詠歌、△亦見ト思イシ時ノ龜タニモ、今夜ノ月ニ寝レヤワスル、五首、

「詠法華經、△夜モスガラ、日メモスニ成ス法リノ道チ、皆此経声ト心ト、△溪ノ響峯ニ啼ク猿、タエニ只此経ヲ説コソキケ、△此ノ経ノ心得タルワ世ノ中ニ売買声モ法ヲ説ヤワ、△峰ノ色谷ノ響モ皆ナガラ、釈迦牟尼仏ノ声ト質ト、△誰トテモ、日陰ノ駒ワ、キラヌヲ法ノ道得ル、人ゾスクナ

△長月モ、紅葉ノ上ニ、雪降リヌ、見ル人誰カ、歌ヲヨマザル、

「詠初雪、△九月ノ事、寛元二年九月廿五日、一尺余降ルヲ御覽有リテ、

(20丁裏)

「宝治元丁未年、在鎌倉之御時、西明寺殿、道歌ヲ御取望之時、
詠ニ教外別伝之意、」

△荒磯ノ波モエヨセヌ、高岩ニ書モ付クベキ法リナラバコ
ソ、

「詠ニ尽十方世界、真実体ト云意、」

△世ノ中ニマコトノ人カ、無ルラン、限リモ見エヌ、太ゾラノ

「詠ニ桃花悟道意、」

△春風ニホコロビニケリ、桃ノ花枝葉ハニワタル、疑モナシ、

「詠ニ十二時中、不空過之意、」

△過キケル、四十年余アマリハ、太虚ノウサギカラスノ道有ケル

「詠ニ同意、」

△人シレズ、メテシ心ワ、世ノ中ノ只山川ノ、秋ノ夕暮レ、

「詠ニ父母初生之意、」

△尋子入ル、深山ノ奥ノ里ナレバ、本モト栖馴シ、ミヤコナリケリ、

(21丁表)

「詠^ス_ニ本來面目意^ヲ

△春ハ花、夏時鳥、秋ワ月、冬雪消テ、涼シカリケリ、

「詠^ス_ニ応無取^(マ)住、而生其心意^ヲ

△水鳥トノ行クモカエルモ、跡タエテ、サレトモ路^ミワ、ハスレサ

「詠^ス_ニ不立文字意^ヲ

△云イ捨テシ、其ノコトノ葉ノ外ナレバ、筆ニモ跡^アハ、留メサリ

「詠^ス_ニ行住座臥意^ヲ

△マボルトモ、覚ヌナカラ、小山田ノ、イタツラナラヌ、僧都^ヅナ

「詠^ス_ニ座禅工夫意^ヲ

△シツカナル、心ノ中ニ、栖ム月ハ、波モクタケテ、光リトゾナ

ル、』

「詠^ス_ニ即心即仏意^ヲ

(22丁表)

△ヲシ鳥カ、カモメトモ亦、見エワカヌ、立波相ノ、浮沈ミ力ナ、	△ヲシ鳥カ、カモメトモ亦、見エワカヌ、立波相ノ、浮沈ミ力ナ、	「詠ニ正法眼藏意、ヲ	△波モ引風モツナカヌ、捨小舟月コソ夜半ノ、境ナリケリ、
△イツモタヌ、我ガ古里ノ花ナレバ、色モカララズ、過ギシ春力	△イツモタヌ、我ガ古里ノ花ナレバ、色モカララズ、過ギシ春力	「草庵偶詠、ナ、	△草ノ庵子テモ覚メテモ、申スコト、南無釈迦牟尼仏、憐ミ給
△愚ヲカナル、我ワ仏ニ、ナラズトモ、衆生ヲワタス、僧ノ身ナレ	△愚ヲカナル、我ワ仏ニ、ナラズトモ、衆生ヲワタス、僧ノ身ナレ	「草庵偶詠、ナ、	△草ノ庵子テモ覚メテモ、申スコト、南無釈迦牟尼仏、憐ミ給
△山ノ駒ノ馬、四ツノ車ニ、ノラヌ人、誠ノ道ヲ、イカテ知ルベキ、	△山ノ駒ノ馬、四ツノ車ニ、ノラヌ人、誠ノ道ヲ、イカテ知ルベキ、	「草庵偶詠、ナ、	△山ノ駒ノ馬、四ツノ車ニ、ノラヌ人、誠ノ道ヲ、イカテ知ルベキ、
△嬉クモ、釧迦ノ御法ニ、逢火草、カケテモ外ノ道ヲ、イカテ知ルベキ、	△嬉クモ、釧迦ノ御法ニ、逢火草、カケテモ外ノ道ヲ、イカテ知ルベキ、	「草庵偶詠、ナ、	△嬉クモ、釧迦ノ御法ニ、逢火草、カケテモ外ノ道ヲ、イカテ知ルベキ、
△ゾノカリミ、峯モ溪ニモ、声タエテ、ケウモ暮レヌト、日クラシ	△ゾノカリミ、峯モ溪ニモ、声タエテ、ケウモ暮レヌト、日クラシ	「草庵偶詠、ナ、	△ゾノカリミ、峯モ溪ニモ、声タエテ、ケウモ暮レヌト、日クラシ

△春	風ニ、我カコトノ葉ノ、散リヌルヲ、花ノ歌トヤ、人ノ見ル	ラ
△梓	弓、春ノ山風、吹ヌラン、峯モ谷ニモ、花匂イケリ、	アツサ
△タノミ	コシ、昔ノシウヤ、ユウタスキ、憐ミカケヨ、麻ノコロ	モニ、
△足	引キノ、山鳥ノ尾ノ、シタリ尾ノ、ナカノ、シ夜ヲ、明シケル	アシ
△愚	カナル、心ロヒトツノ、行末ヲ、六ノ道ニヤ、人望ムラン、	ゴロカ
△シツ	男ノ、カキ子ニ春ノ、立シヨリ、フルセニヲフル、若カシ、	シツ
△六	道ニ、遠近迷フ、トモカラワ、我父ソカシ、我母ソカシ、	ロカ
△サナヘ	タル始メツカタノ、祈リニハ、広瀬滝田ノ、マツリヲ	ゾツム、
△太	虚ニ、心ノ月ヲ詠ルモ、暗ニ迷フテ、色ニメテケリ、	ソスル、
△アラタウト	奈良ノ仏ノ、フルコトバ、学ブニ六ノ道ニ越タ	アラタウト、

リ、』

△本モ末モ、皆偽リノ、ツクモカミ、思イ乱ル、夢ヲコソ説ケ、
 △夏モ冬モ、思フニワカズ越山ニ降ルハ白雲、鳴ルハイカツチ、
 △都ニハ、紅葉シヌラム、奥ノ山、今ヨモケサモ、アラレ降リケ
 △我庵ハ、越ノ白山、冬籠リ、氷モ雪モ、雲カムリケリ、
 △アツサ弓、春クレカムル、今ケ日ノ日ヲ、引キ留メツムヲチコ
 △花紅葉、冬ノ白雪、見シコトモ、思エハクヤシ、色ニメテケリ、
 △草ノ庵立チテモ居テモ、祈ルコト、我ヨリ先キニ、人ヲ渡サ
 △イタツラニ、過ル月日ハ、多ケレト、道ヲ求ル時ソスクリ、
 △イタツラニ、耳ノキニ、笠巣ノ巣ヤツクヤラン、マエニカムレリ、サムキ、
 △声ニカラ、耳ノキヨル、時ナレバ、我レトモナラヌ、カタラ

イソナキ、
 △草ノ庵、夏ノ初ノ衣カニ、涼キスター、カカルバカリソ、
 △心トテ、人ニ見スベキ、色ヅナキ、只露霜ノ、結ノミ見テ、
 △イカナルカ、仏トイフト、人間バ、カヤカシニコソ、ツムライ
 ニケリ、
 △世ノ中ハ、マトヨリ出ル、キサノ尾ノ、ヒカヌニトマル、サワ
 リバカリゾ、
 △朝アヒ日ヒマツ、草葉ノ露ノ、程ナキニ、イソキナ吹フキ
 メヤ、
 △心ナキ、草木モ今日ワ、シボムナリ、目ミ見タル人、秋エサラ
 メヤ、
 △隙ヒモナク、雪ハ降リケリ、谷フカミ、春キニケリト、鳶ゾ啼ク、
 △此ノ心、アマツ空ニモ、花ゾナラ、三世ノ仏ニ、奉ラメヤワ、
 右謹而書写、永平寺初祖大和尚之御詠歌、
 奉附授梯公首座禅師伏乞洞皇此丘喜舜判、
 応永廿七年六月朔日、

一永平寺不立三拜者、

國王大宦ト云亦安樂行品

毎日行事在ル其ノ文常離國王及國

王子大臣官長ト有ル師小參法語ニモ此意多故不立歟、

一行事時白袴ヲキル事宝慶記具ニ見エタリト云、

一僧堂前ノ鐘之事師帰朝之時取時也云、
不持數珠一事衆寮清規ニ見エタリト云云、但似無礼

一承陽庵打板之事師自宇治取持ト見エタリ、

一沈金箱之事住持一代一度開之拝伝法明鏡也、

一波着寺御置在ル物共涅槃像伝灯錄鉄鉢、

一虎齒之柱杖之事今在越州大野之宝慶寺之十六善神盜賊取テ今

ハ無レ之、』(24丁表)

一道元和尚誕生者人王八十三代土御門之御宇正治二庚申歲正月

二日也當延寶八庚申歲凡四百八十二年歟、

一入宋者人王八十五後堀川院貞応二癸未歲仲春也當延寶八庚申歲正月
四百五十九年歟同歸朝者同院御宇安貞元丁亥年也出入五年在宋

自二 安貞元、今年庚申迄、四百五十五年歟、

リ

一興聖寺開闢者、人王八十六、四条院御宇、天福元

癸巳

歲春也、當ニ今年庚

申

一永平寺開闢者、人王八十七代、後嵯峨院御宇、寛元

癸卯

年夏也、當ニ今

年庚申

歲庚申曆、凡四百三十八年歟、

癸巳

歲春也、當ニ今年庚

申

一道元和尚御遷化者、人王八十八代、後深草院御宇、建長五

癸丑

年八月

廿八日也、當ニ今年庚申追、凡四百廿八年歟、

(24丁裏)

一道元和尚之行狀、附神德妙行付上堂偈頌、付書狀問答付御詠歌、書

之畢、

一二代懷奘和尚之行狀、同書之、此外世間流布之板本子細、仍

テルニ

有之、此

一本不記、才

一三代義介和尚之行狀、是世間流布之板本有之、故此本除、